

「走、走」

鈴を振るような声に揺り起こされた。

走はゆっくりと目蓋を持ち上げる。いつもより高く澄んだ声音に嫌な予感がした。触れるだけのキスを落とす。「おはよう、走」とそれはそれはびっくりするほど可愛らしい清瀬灰二が走の顔を覗き込む。

「ハイジさん……」

走は呻くようにその名を呟く。

悪い予感の中した。少女めいた姿へと変身を遂げた清瀬はにっこりと笑ふ。走は頭の痛む思いでベッドの上で身体を起してた。溜息を吐きながら清瀬へと目を向ける。

「また縮んじやったんですか」

「うん、またなんだ」

清瀬が若返ったのはこれで三回目だ。初めは六歳くらい、次は十二歳くらい、今回も前回と同じ十二歳くらいに見える。自分も一度小さくなったり一晩経てばもとの戻るとその辺りではもうあまり心配していない。走の浮かない顔の原因は別にあり、走がもう一度溜息を吐くと、清瀬は唇に指を立ててくすくすと愛らしく笑った。

「そんなに溜息ばかり吐いてどうしたんだ」

理由なんて解っているくせにそんなことを口にする。返事をす

る気になれなくて、走は黙って清瀬を見詰めた。

整った容貌は今やすべてが可憐なものへと変換している。本来の清瀬も美人と形容されても違和感のないような顔立ちをしているがそれでも女性と見紛うことはない。けれど、今日の前にここにいる幼い清瀬は一見本当に少女に見える。大きな瞳もさらさらの髪も艶々とした小さな唇もとても可愛らしい。もともと男性の中でも華奢な身体つきをしていたが今はそれがさらにほっそりと繊細なものになっていた。白いＴシャツ一枚を纏っただけの身体が文字通り折れそうに細いことを走は身を以って知っている。知っているから困っている。

走の憂鬱の原因はそれだ。

清瀬はとても嬉しそうにしている。きつとまた走のことを誘惑するつもりだ。清瀬が走を愛しいと思ふ気持ちと、走が清瀬を愛しいと思ふ気持ちは根本的には同じはずなのにときどきずれることがある。

清瀬は走にすべてを与えたいと思っている。多分、どれだけ幼からうつが未熟だろつがそれが走に与えられるものならば清瀬は身を投げ出してくみひょっとしたら差し出せるものがあることに自分の価値を見出し安心しているのかも知れない。走の所為で自分の身体が傷付いてもいいと思っている。

走は清瀬を大事にしたいと思っている。痛いことも酷いことも